
かなしばり

大庭園

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かなしばり

【Nコード】

N1396C

【作者名】

大庭園

【あらすじ】

突然みてしまう悪夢。現れる悪霊。いい夢ばかり見たいものです。

「今日は寝つきがいいな」

僕は目を閉じながらつぶやいた。

深夜十二時に布団に入り、三十分ほどで眠気がやってきた。いつもより早く、スムーズだ。カーテンがゆっくりと締まるように、僕の意識はなくなってゆく。体の力は抜けてゆき、全身がそうっと布団に沈み込む。

その直後に夢が始まった。

まず、目に付いたのは女性教師だ。赤いセーターを着ていて、小学校低学年ぐらいの生徒を五人ほど引率している。ふとつちよの男の子と、リュックを背負った女の子がいる。ここは市立図書館のようだ。現実の市立図書館とは随分違う。夢の中の市立図書館は、古びたこげ茶色の本棚がよく似合っていた。館内には静かな空気が流れている。老人を中心とした利用客が同じフロアにいるようだが、死角に隠れているのか、僕の視界には入っていない。存在している吐息だけが伝わってくる。

小学生達はわりと静かにしている。大声をあげてはしゃぎまわって、他の利用客からクレームが出ることはなさそうだ。僕は安心した。短気な中年の利用客などが、「うるせえ！」と子供を怒鳴りつける光景を見なくてすむから。

女性教師は生徒達に図書館の歴史や、本の内容を説明している。

僕は五メートルほど離れて、彼女達を見つめている。女性教師は僕に気付いたが、一秒ほど目を合わせただけで、すぐに生徒達に向き直った。僕に対して、あまり関心がないらしい。僕のことは視界に入らずに、生徒達に説明を続けている。生徒達の輪には入り、自分も同じように引率してもらいたい。そんな感情が、僕の心に湧く。「このコーナーは日本の歴史について書かれた本が並んでいるね」

女性教師が棚を指差しながら説明している。

「みんな、見てごらん。織田信長の本があるよ。みんなの中で、織田信長のこと好きな人はいる？」

「僕は武田信玄が好きです」

ふとつちよの男の子が答える。周りの利用客の迷惑にならないように、ちゃんと小声で話している。

「騎馬隊がかっこいいんです」

「そう。武田信玄が好きなんだ。じゃあ、武田信玄の本を探してみようね」

女性教師がそう言ったとき、異様な気配がした。湿って腐っているような、生臭い気配だ。

カーテンが開いた窓を、僕は見た。

窓の外に、女が立っていた。白いワンピースを着ている。腰のあたりまで、長い黒髪を垂らしている。思わず目が合った。一目でわかる。この女は人間ではない。

（まるで貞子みたいだ）

僕は映画「リング」を思い出した。怖くなって目をそらした。

（恐ろしい霊が現れたぞ。はつきりはこちらを見ている。君達のことも見ているぞ！みんな、はやく逃げるんだ！）

女性教師たちに向かって叫ぶ。が、心の中で叫ぶばかりで、声が出ない。

「電車の本はどこにあるの？先生」

「どこだろうね。探してみようか」

（はやく図書館から逃げるんだ！この女の霊は部屋の中に入ってくるぞ！）

僕は窓を見た。女と再び目が合った。彼女の目は語っている。「すぐそっちへ行く」と。首筋から冷や汗が出てきた。背筋がぞつとする。女性教師たちよりも、僕のほうに攻撃性が向いているらしい。こちらにぴたりと目を合わせてくる。僕は視線をはずそうとするが、はずした途端、好奇心が湧いてきて、すぐに窓を見ってしまう。そして、また目が合ってしまう。窓の女は、いよいよ館内へ入ってくる

ようだ。開いた両手を窓にへばりつかせている。窓ガラスに頬を押し付けている。頭が少しずつ、中へ入ってきている。

（逃げる！みんな逃げる！そして、俺も逃げなくちゃ！）

声が出ない。みんな気付いてくれない。数メートル先に、悪霊が入ってこうとしているのに、誰もそれに気付かない。僕はもどかしくて仕方がない。何で声が出ないんだ。

窓の方へ振り返ったとき、すでに女は館内へ入っていた。本棚の脇に立ち、びしょびしょに塗れた裸足で床を汚しながら、僕だけを見ている。

（入ってきた！）

僕は飛び上がった。

（どうして僕だけを見ている？小学生達のほうが目立っているのに！）

女性教師が助けてくれないものか、僕は思った。彼女が凜とした声で注意すれば、この悪霊は退散しそうな気がする。そんな気がするが、女性教師は僕のことはまったく見ないまま、生徒達を連れて次のフロアへ行ってしまった。

女と二人きりになった。相変わらず、目を合わせてくる。僕のことを、とても恨んでいるようだ。憎しみの対象を、僕に定めたようだ。

（これは殺される）

とっさにそう思い、本棚の角に自分のすねを叩き付けた。女は足を動かすでもなく、こちらに迫ってくる。早く逃げなければ。僕は繰り返し、角にすねをぶつけ続けた。

「痛い！」

叫び声とともに、僕は目がさめた。瞼が開き、ぼやけた視界が広がる。部屋の天井が見える。首を振って視線を横にずらすと、テレビが見える。自分の部屋だ。夢からさめたのだ。あの女から、逃げ切ることができたのだ。

目がさめてしまうと、夢の中のできごとは、とたんに怖くなくな

つてくる。とんだ夢を見たものだ　と笑い話になる。僕はすっかり気が楽になって、もう一度寝ようと思った。時計を見た。深夜十二時三十五分　。寝付いてから、五分ほどしか立っていない。かなり長い夢に感じたのだが。

布団にもぐり込み、顔半分だけを出して、眠りにつこうとした。

ふと、嫌な気配がして、窓を見てみる。

窓の外に、あの女がいた。

（そんな！）

両手を窓にへばりつかせ、中へ入ってこようとしている。

（夢からさめたんじゃないかったのか？それとも幽霊は実在するものなのか？そんな馬鹿なことがあるか。これは夢だ。起きたと思ったが、実はまだ夢の中だったんだ。ちゃんと目が覚めれば、こんな女、すぐにいなくなるさ）

僕はまた、眠気に襲われた。こんな女の目の前で眠りたくない。

起きていたい。だが、体がうごかない。寝返りさえうてない。瞼は途方もない重さになっている。逆らえない。

僕はこのまま眠っていいのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1396c/>

かなしばり

2010年10月8日15時14分発行